

災害時におけるコミュニティづくりに関する支援技術 —三宅島噴火災害での支援活動を通して—

原口奈千 今泉貴暁 鈴木崇拡
橋本雪乃 高城智圭 大木幸子

杏林大学保健学部看護学科

要旨

本研究の目的は、広域的な避難が行われた三宅島噴火災害時の支援活動を参考に、災害時におけるコミュニティづくりに関する支援技術を明らかにすることである。三宅島噴火災害において支援を行った保健師2名および社会福祉協議会職員1名、地区リーダー1名に対して避難中の支援内容についてインタビューをし、質的に分析した。その結果、5個の大カテゴリーと16個のカテゴリー、35個のサブカテゴリーが抽出された。災害時のコミュニティづくりにおいて、個別や集団、地域に対して支援を行うという支援の原則は、平常時と同様であると示唆された。そして、その中でも個別支援は、とりわけ重要な支援技術であると考えられる。さらに、災害により変化したコミュニティに対し、どのようなコミュニティを維持、形成していくかを住民と共に探ることが、支援者には求められる。

はじめに

地域には人と人とのつながりがあり、何らかのコミュニティを形成しながら生活している。しかし、阪神・淡路大震災の被災地域では、仮設住宅に入居する際に、被災前のコミュニティに関係なく高齢者や障害者を優先的に入居させた。その結果、閉じこもりや孤独死の発生、精神疾患、慢性疾患の悪化が指摘された¹⁾。神戸弁護士会の調査では、孤独死は震災後1年までに51人、2年を経過して127人となった。死因としては、アルコールが原因とみられる肝臓病の有病率が高く、慢性疾患の悪化が関連していた²⁾。後藤³⁾は平成10年と13年の2回の調査から、仮設住宅建設地域では人口増加、特に単身所帯数の増加によって孤独死が増加していることを報告している。また、仮設住宅に代わるべく整備された恒久的復興住宅にも、孤独死のリスクの高い単身者が多く居住していることが報告されている。塩崎⁴⁾も、復興公営住宅の孤独死について、震災後5年から9年の4年間で251人の孤独死が発生していることを報告し、「これは、復興公営住宅だけに特有の問題とは言えないが、復興公営住宅がかつて存在したコミュニティを喪失させ、高齢者を集住させた結果という面も否定できない」と述べている。

このような阪神・淡路大震災での経験から、被災前のコミュニティを意識した震災後の中長期支援の重要性が指摘されてきた。そこで、新潟県中越地震では、被災前のコミュニティに配慮した仮設住宅入居が行われた。重川⁵⁾はその効果を、避難時にも集落単位で生活したことで、阪神・淡路大震災の時のような高齢者の孤立化や暗さは感じなかったと報告している。一方で、被災後のストレスや疲労による死亡が後を絶たなかったとも報告されている⁶⁾。したがって災害時には、被災前のコミュニティごとに仮設住宅に入居できるよう配慮するだけでなく、健康課題の発生を予防するため、被災前のコミュニティを維持しながら様々な支援を行うことが重要であると考えられる。平常時からコミュニティづくりを行っている保健師には、災害時においても新しいコミュニティづくりへの支援が求められていると考えられるが、このことは全国保健師長会でも報告されている⁷⁾。

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、近年における最大規模の災害である。さらに、津波や福島第一原子力発電所事故の影響により、住民は広域的な分散避難を余儀なくされている。広域分散避難により、被災前からあるコミュニティのつながりが分断してしまい、人

と人との関わりが薄れてしまう可能性がある。そのため、東日本大震災後の支援においても、コミュニティづくりは重要であると考えられる。先行文献においても、災害時にコミュニティに対する支援は重要であると述べられている⁵⁷⁾が、コミュニティづくりの具体的な支援内容について言及した報告はほとんどなかった。2000年に大噴火した三宅島では全島避難となり、21都道府県、都内23区、32市町村に及ぶ広域分散避難となった。また、避難直後から被災者に情報誌の配布や被災者同士が集う場をつくることなど、コミュニティを意識した支援が行われていた⁸⁹⁾。

そこで本研究は、広域的な分散避難が行われた三宅島噴火時の活動をとりあげ、災害時におけるコミュニティづくりに関する支援技術を明らかにすることを目的とした。

用語の操作的定義

本研究では、以下のように用語を操作的に定義する。

「災害時」とは、被災直後から被災前と同様の生活が回復できるまでの期間を指す。

「コミュニティ」とは、同じ地域に居住して利害を共にし、日常生活において深く結びついている社会のことを指す¹⁰⁾。

「コミュニティづくり」とは、専門職と協働しながらも、住民同士が主体的につながりを形成しているコミュニティを目指した働きかけを指す。ここでいう主体的につながりを形成しているコミュニティとは、住民が自ら地域の課題と向き合い、住民同士が協働して、課題に取り組むコミュニティである。

Table 1 The time-series of the volcanic eruption disaster

Time	Event
June 26, 2000	The volcano became active
August 18, 2000	Large-scale eruption (Mt. OYAMA)
September 2, 2000	The Governor of Tokyo recommended that all islanders evacuate (Evacuation in 21 prefectures; Tokyo, 23 wards; 32 cities)
September 2000	“Miyake Islanders’ group” ^{*1} start
October 2000 (One month after evacuation)	Publication of “Miyake-no-kaze” ^{*2} and “Public information on Miyake”
	Publication of “Islanders’ telephone book” ^{*3}
December 2000 (Three months after evacuation)	“Fureai-assembly” ^{*4} starts
January 2001 (Four months after evacuation)	“Leader of inhabitants system” ^{*5} start
April 2001 (Seven months after evacuation)	“Genki farm” ^{*6} opens
January 2002 (One year and four months after evacuation)	“Yume farm” ^{*7} opens
February 1, 2005 (Four years and five months after evacuation)	Evacuation directive cancellation

*1 “Miyake Islanders’ group” is an independent islanders’ group organized to exchange information in every refuge area.

*2 “Miyake-no-kaze” is an informative magazine that carries the voice of the refugees from Miyake Island, published by the Miyake Island disaster support center and Tokyo volunteer support center. This magazine was mailed regularly to refugees.

*3 The “Islanders’ telephone book” is a booklet made by the Miyake Island disaster support center and Tokyo volunteer support center. It was created to collect the addresses of the inhabitants who evacuated over a wide area.

*4 “Fureai-assembly” was a meeting to create opportunities to come back to the island. Refugees performed arts specific to the locality and had time to talk each other.

*5 The “Leader of inhabitants system” is an employment business that the Miyake village office entrusts to the Miyake village council of social welfare. Leaders were elected from every refuge area. They provided information and gave advice to refugees. They reported their activity to public health nurses and staff of a social welfare council.

*6 *7 “Genki farm” and “Yume farm” are employment projects that the government opened for the aged. The purpose of these businesses provide employment for the aged, promote exchanges between refugees, and produce special agricultural products of the island.

Table 2 The summary of the person of investigation object

Interview cooperator	Age	Interview time
Public health nurse A	60	2 hours 22 minutes
Public health nurse B	68	1 hour 17 minutes
staff of council of social welfare C	50	2 hours 38 minutes
A leader of inhabitants D	60's	2 hours 16 minutes

研究方法

1. 研究デザイン

ケーススタディ

2. 調査期間

平成23年7月～平成23年8月

3. 三宅島の概要

東京の南海上約180kmに位置する、周囲約38kmのほぼ円形に近い島である。今回取り上げた2000年の噴火災害以前から噴火を繰り返し、近年も約20年毎に噴火している。全島避難時(2000年9月)の人口は3,829人で、高齢化率は29.5%であった。島内には5つの集落があり、農漁業、観光業が盛んである。本研究では2000年に起こった噴火災害時の活動を取り上げる。噴火災害の経過は、Table 1の通りである¹¹⁾¹²⁾。

4. 調査協力者

全島避難から帰島直後までの4年半、避難住民の支援を担った保健所保健師、社会福祉協議会職員、三宅村民である地区リーダーに協力を依頼した(Table 2)。

5. データ収集方法

調査協力者に個別インタビューを実施した。インタビュー内容は協力者の了承を得てテープに録音し、逐語的に収集した。

6. インタビュー内容

三宅村での勤務期間と勤務年数(保健師、社会福祉協議会職員のみ)、噴火災害が起こる前の住民同士の関係性、避難地域である東京都内でのコミュニティづくりの経過および支援内容、他職種との連携、コミュニティづくりの支援を通してのコミュニティおよび住民の様子の変化、コミュニティづくりの経過で必要と感じた支援や困難だったことについて聞き取りを行った。

7. データの分析方法

収集した逐語的データを、コミュニティづくりに関する支援技術に焦点を当て、意味をとることができる文脈ごとにラベル名をつけた。それらを支援活動ごとに分類をし、支援技術に関するサブカテゴリーを抽出した。さらにサブカテゴリーからカテゴリーを抽出し、カテゴリー間の関連性を分析した。

8. 倫理的な配慮

調査協力者に、研究の目的と方法、調査内容について口頭および文章にて説明し、承諾を得た。データ上で

調査協力者は匿名とし、データは研究が終了した時点で全て破棄した。本研究は、杏林大学倫理審査委員会の承諾を受けた(承認番号23-27)。

結果

1. コミュニティづくりにおける支援技術に関するカテゴリー

分析の結果、災害時におけるコミュニティづくりに関する支援技術として5個の大カテゴリー、16個のカテゴリー、35個のサブカテゴリーが抽出された(Table 3)。本文では、大カテゴリーを[], カテゴリーを《 》, サブカテゴリーを〈 〉, 各サブカテゴリーの代表的な語りのデータを「」内に示した。以下大カテゴリー、カテゴリー、サブカテゴリーについて説明する。

1-1.[基盤となる技術]

支援者同士が互いに支え合いながら、住民を支援するネットワークを避難先に新たに構築し、住民と協働する。

1) 《支援者同士が支え合う》

住民への支援を継続していけるよう、支援者同士が悩みを相談し合い、支え合う。

「支援者へのメンタルヘルスっていうあたりも、メンタル部分には、これは支援者のメンタル... っていうのは、やはり東京都(保健師)の仕事だと思っんです。」

2) 《避難している住民と協働する》

支援者だけで行える支援には限界がある。住民と同じ立場に立ち、互いに信頼しながら、住民と協働する。

① 〈避難先の地区からキーパーソンを見出す〉

災害時では、平常時とは異なる住民がキーパーソンとなりうることを意識しながら、避難先ごとに住民の中からリーダーとなるキーパーソンを見出す。

「非常時にリーダーとして、あの立ち現れてくる力っていうのは、平時のリーダーシップがまた違うのよ。思わぬ人がこう、リーダーとして立ち上がってくるわけ。」

② 〈住民の力を信じる〉

住民は、個人としても集団としても住民同士で支え合える力を持っているため、住民の力を信頼する。

「その人たち(被災前のキーパーソン)がいないから人間の集団としてね、力を発揮されない。そんなことないから。新しい形を考えてくる。」

Table 3 Categories of support skills for community development

Large Category	Category	Sub Category	
1.Fundamental skills	1) Supporters support each other	① Supporters support each other	
	2) Cooperate with residents taking refuge	① Find a key person in the refuge area	
		② Trust the power of refugees	
		③ Build an equal relationship with the refugees	
	3) Build a new, wide network after the disaster	① Cooperate with related organizations which existed before the disaster	
		② Cooperate with related organizations in the area of refuge	
2.Skills to form and maintain system	4) Form a system which enables the public office connected with refugees in each of the refuge area	① Form a place of contact to make sure the support and information reaches the residents in each of the refuge area	
		② Form a system which enables the leader of inhabitants to contact and talk with each refugees	
		③ Exchange information interactively between refugees and the public office through the leader of inhabitants	
	5) Form an employment system which helps in community development	① Form a place where the refugees can get together and resume their former jobs, which they are familiar with	
		② Form a system which involves the leader of inhabitants in the employment project	
	6) Support the leader of inhabitants in various ways	① Cooperate with the leader of inhabitants and consult individual cases	
		② Provide health education to the leader of inhabitants	
		③ Understand and provide support for the stress and worries unique to the leader of inhabitants	
		④ Form a place where leader of inhabitants and the public office can exchange information	
	3.Support by visiting to refugees	7) Understand the problems due to the change in life after the disaster	① Understand the problems by visiting the place where people assemble
			② Understand the problems through home visiting
			③ Understand the problems through meetings with the leader of inhabitants
8) Provide individual support through home visiting		① Provide individual support through home visiting	
9) Coordinate between the community and refugee		① Support refugee who wish to keep a distance from the community	
		② Counsel individuals about relationships with other refugees	
		③ Provide support to prevent isolation from the community	
10) Provide life and health support by visiting to the place where people assemble		① Provide health education by visiting to the place where people assemble	
		② Counsel refugees about health and life by visiting to the place where people assemble	
4.Maintain the community which existed before the disaster		11) Support to maintain the relation between refugees	① Provide a gathering place where is multilayer and various
	② Support to a relation between the refugees		
	③ Send periodical information to the refugees		
	12) Maintain the community's identity	① Utilize each town as a small community before the disaster	
		② Maintain the thing which each community has built so far	
	13) Take note of the power the refugees had before the disaster	① Take note of the power the refugees had before the disaster	
5.Coordination to make the community comfortable	14) Do not emphasize the relation of the community too much	① Be aware of the negative aspects regarding the connection of the community	
		② Respect refugees who wish to keep a distance from the community	
	15) Maintain a connection with residents and their association at the place of refugee	① Provide chances for interactive exchanges with residents at the place of refugee	
		② Ask for cooperation from the residents association at the place of refugee	
	16) Maintain the community open to every person who wishes to come back	① Maintain the community open to every person who wishes to come back	

「人間の集団のダイナミズム、というか力を生み出す能力があるんだ。」

③ 〈住民と対等な関係を構築する〉

支援者は、住民と対等な立場に立ち、住民の中に入ることで、協働できる関係を築く。

「皆さんと一緒に草取りやったり ... あるいは ... なんかにひっこぬいたり、すくったりまいたり。」

3) 《被災後の新たな広域ネットワークを構築する》

避難先でも新たなネットワークを構築する必要がある。被災前のネットワークを維持しつつ、個別支援を通し避難先の関係機関とも連携することで、より広域的なネットワークを構築する。

① 〈被災前からある関係機関と協力する〉

支援者同士で定期的な情報交換の場を持ち、被災前から地域にある関係機関と協力する。

「訪問活動をしてるので、もう連絡会をしょっちゅう持っていました。」

② 〈避難先の関係機関と協力する〉

被災前からあるネットワークだけで住民に支援を行うことは困難である。住民への支援を通し、避難先の行政や病院などの関係機関と協力することで、広域的なネットワークを構築する。

「じゃあそういうことだったらこのへんの病院はどんなのかな？とか、それはこちらがネットワークありますからね。なければそこでまたつくればいいわけだから。」

1-2.[仕組みをつくり、支える技術]

コミュニティづくりを行うために、農園や地区リーダーなどの雇用事業や、住民と行政がつながることができる仕組みをつくる。また、支援者が地区リーダーを支えることで、その仕組みを維持する。

4) 《避難先単位で、行政と住民がつながる仕組みをつくる》

避難先単位で、地区リーダーや島民会といった、行政と住民の架け橋となる仕組みをつくる。

① 〈避難先単位で住民に支援や情報が行き渡るような窓口となる〉

広域分散避難となり、正確な情報が住民に行き渡らないこともある。行政からの支援や情報が行き渡るよう、避難先単位で島民会などの仕組みをつくる。

「ただ被災者の、当事者の、その一なんていうの、組織が立ち上がるとそこが窓口になるから、あのいろいろな情報とか支援が、その被災者にきちんと行きわたって行く。」

② 〈地区リーダーが一人ひとりと連絡、相談できる体制をつくる〉

地区リーダーが分担し、訪問や電話、手紙を用いて住民に連絡をとることができる仕組みをつくる。また、住民一人ひとりに地区リーダーが連絡をとり、相談にのる

ことができるようにする。

「24～5名雇われた情報連絡員さんって言うのは、地域を分担して（中略）都外に住んでいる人たちとも電話をしたり、その一、お手紙やり取りしたり、みんな分担が決まっていたんです。」

③ 〈地区リーダーを通して、住民と行政の双方向の情報交換を行う〉

地区リーダーが、担当地区の住民と話をすることで、住民の率直な意見を行政に伝えてもらう。また、行政が連絡会で地区リーダーに正確な情報を伝え、住民にも情報を行き渡らせるという双方向の情報交換を行う。

「村役場と住民の架け橋をして、で、住民の村への生の声、素直な、率直な声を拾いあげてそれを市役所に、あっ、村役場に伝えたり。」

「きちんと毎月の会議で役場の職員が正して、正しくはこういう情報ですと、いうことで、確認をしてもらう。」

5) 《コミュニティづくりにつながる雇用の仕組みをつくる》

被災や広域分散避難により、住民は仕事を失ったり、避難前の近隣住民がどこに避難したかわからなくなる。そのため、避難先で孤立しがちである。住民同士が会おうきっかけをつくり、住民同士がつながる支援を行う。さらに雇用事業の体制をとることで経済的支援を行う。

① 〈住民が集まり、従来の慣れた仕事を行える場をつくる〉

支援者は、住民が共に働く場をつくることで、経済的支援だけでなく孤立を防ぐための仕組みをつくる。さらに、避難前の仕事を行う場をつくることで、生きがいを持てるよう支援を行う。

「この島民の声として、ここにも書いてあったかもしれないけど、集まって働けて、避難生活に勇気がわきますって。集まってっていうのが、またすごいよね。」

② 〈雇用事業として地区リーダーの仕組みをつくる〉

避難先の地区ごとにリーダーとなる住民を選定し、支援や情報が行き渡るようにする。雇用事業という仕組みをつくることで、避難により仕事を失った住民に対し経済的支援も行う。

「雇用事業として雇ってるから、そんなたくさんのお金ではないけど、あの一仕事として、情報連絡員になる人に。24～5名いつもいて、どんな仕事をしてたかっていうと、あの一、村の大事な情報提供、大事なんですよ。」

6) 《地区リーダーを多面的に支える》

地区リーダーも一人の住民であり被災者である。地区リーダーの思いを把握して支え、支援に関する知識や技術を学べるよう、定期的に他地区の地区リーダーや行政との情報交換の場をつくる。

① 〈地区リーダーからの個別ケースの相談を受け、一緒に動く〉

地区リーダーは、担当している地域の様々な課題に対応していく必要がある。地区リーダーだけでは対応が困難なケースもあり、相談があれば行政が共に動くことで、支援者を支える。

「っていうことを心がけて社協では、連絡会議を持って、私たち（社協）もそこに集まる人たちを。それは心得ているので、みんなで支えたり、個別の相談が出たら、すぐにこう個別の相談に動く、動けるような、あの一、ことをしてましたね。」

②〈地区リーダーに対して健康教育を行う〉

地区リーダーは専門職でないため、住民に支援を行う際、専門的な知識が必要となることがある。定期的に行われる連絡会で、時季に合った健康教育を地区リーダーに対して行う。

「一つはもう、集団的な指導だよ。情報連絡委員の会議では、毎回保健師から、季節季節の健康管理上の注意だとか。」

③〈地区リーダーゆえのストレスや悩みを把握し、支える〉

地区リーダーは住民に最も身近な存在であることから、常に住民の支援に関わる役割を担っている。地区リーダーゆえのストレスや悩みがあるため、専門職が相談相手となり支える。

「できるだけ（中略）情報連絡員さんが1人で抱え込まない。うーん、私たちがすべき所は私たちがして。（中略）そういうリーダーだとか、情報連絡員さんだとか住民とのこう1番接点でたくさん話を聞いて、その人が疲弊しないように、1人で抱え込んで大変じゃないように。」

④〈行政や地区リーダーの情報交換の場をつくる〉

社会福祉協議会や保健師、村役場の職員など、行政と地区リーダーによる会議を定期的に関き、情報交換の場をつくる。他の地区リーダーからの情報を得ることで、他地区での支援の方法を参考とし、地区リーダーが支援を振り返る機会をつくる。

「毎月一回ずつ、あそこの板橋で集まりがあって、その報告会というか色々あるわけね。」

「そうするとそれを振り返れるわけ自分たちがそうすると（中略）やることがいいのかな？悪いのかな？っていうそういう考える糧、ひとつのあれになるっていうのはね、すごくこれ自体がいいことだなって思ったのね。（中略）色んなもつと細かい話も聞けたりしてね。」

1-3.[出向く支援]

長期の避難生活時には、住民の生活課題や健康課題への支援、また孤立してしまう可能性のある住民への支援が求められる。そのため、支援者が家庭訪問や住民が集う場に出向いて支援を行う。

7)《災害によって変化した避難生活での課題を把握する》

住民が集う場に出向くことや家庭訪問を行うことにより、住民の生活や健康に関する課題を把握する。また、把握した課題を他職種との会議を通して共有することにより、地域の課題を把握する。

①〈集う場に出向いて課題を把握する〉

住民の集う場に出向くことで、住民の普段の生活の状況を把握し、生活や健康の課題を捉える。また、集う場に来ている住民と話をすることで他の住民の状況を把握する。

「ああいうところ（住民の集う場）を定期的に回ってたっていうのはよかった。（中略）そこらへん行くとみなさんの生活、普段の生活がわかるでしょ？...で、そこからいろんな情報が、あそこの家のお兄ちゃんがこうなんだこうなんだとか...。」

②〈家庭訪問を通して課題を把握する〉

家庭訪問を行うことで、生活の状況を把握し、住民の健康や生活に関する課題を捉える。

「行ってみたら三宅って結構精神障害者が... 少なくないんですね。それで聞いたら、障害年金もらえるレベルの人がぜんぜんもらなくて...」

③〈地区リーダーとの会議を通して課題を把握する〉

地区リーダーとの会議を通し、個別支援の中から出てきた課題を行政の職員と共有し、地域全体の課題として捉える。

「情報連絡員会議っていうのを、社協が月1回開いたんです。（中略）村の保健師さんが必ず出てきたり、それから、東京都の福祉の担当の人だとか、我々保健所の保健師だとか、あと介護の関係者だとか、それから民生委員さんだとか、地域のそれぞれに、（中略）個別の支援をしている人たちがここに集まって、月1回関与するの。すると情報連絡員さんが、あの一、今こんな生活してるよだとか、いろいろあって、そうするとそこで、地域の課題が見えてくるの。」

8)《家庭訪問により個別支援を行う》

家庭訪問をすることで、住民がどのような避難生活を送っているのかを知り、住民それぞれが抱える課題を捉える。また、健康や生活に関する相談にのり、支援を行う。「そういうふうな仕事の仕方。ともかく最初はだから... 個別から入った。ただどこから、ちょっと困ってるとか行ってとか... あ、行ってと言わなくても『こういうことが困ってんだ。』って。『じゃあ相手が拒否しないなら行こうよ。』っていうことで、行ったんですね。」

9)《住民個人とコミュニティとの関係を調整する》

住民の中には、周囲との関係を持ちにくい人や、コミュニティのつながりから距離を置きたい人もいる。そのため、それぞれの状況に応じて個別に支援を行う。また、住民同士では相談することができない悩みを持つ人の相談にのる。

①〈コミュニティのつながりから距離を置きたい人に対

して支援する)

コミュニティのつながりから距離を置きたい住民もいることを把握し、個別支援を行う。

「コミュニティの良さややっぱりあの一、そういうところに、嫌な人もいるわけで、(中略)それは(中略)個別フォローっていうか」

②〈住民同士の関係性についての個人的な相談を受ける〉

被災前からの結びつきが強いがゆえに、住民同士では相談できない悩みもある。そうした住民の相談を受ける。「私たち(保健師)が相談しなきゃ(受けなきゃ)いけないことは、人に自慢できることじゃないから内容が。(中略)島の人には言いたくないっていうことがあるわけですよ。」

③〈コミュニティから孤立しないように支援する〉

周囲の人々との関わりを持ちにくく、孤立しそうな人に対して支援を行う。

「(集う場に)出てこない人を、なるべく、あの一みんなでこういう風にして話すといいよ。大事だよって言って、序々にね。」

10)《集う場へ出向いて、生活や健康への支援を行う》

住民が集う場に行き、健康相談や生活相談、健康教育などを行う。

①〈集う場へ出向いて、健康教育を行う〉

住民が集う場で、住民に対して季節ごとの健康教育を行う。

「それで一緒に働きながら(中略)ちょっと時間があると、ミニ健康教育を朝したり。」

「そこでいろんなことをあの一・一・一まあ季節季節の、こちらは健康教育と称するんだけど。」

②〈集う場へ出向いて、住民の健康相談や生活相談にのる〉

住民が集う場で、血圧測定を行うなどの支援をしながら、健康や生活に関する個別の相談に対応する。

「そこ(集う場)にも毎日保健師が行って、血圧測ったり(中略)それからおしゃべりしたり、一緒に編み物したりっていうことで、その、健康相談を受けてましたねえ。」

1-4.[被災前のコミュニティの維持]

広域分散避難により、住民同士がつながりを維持することが困難になる。そのため、コミュニティのアイデンティティや被災前からの住民同士が支え合う力を維持することで、被災前のコミュニティを保つことができるようにする。

11)《住民のつながりを維持できるようにする》

広域分散避難の影響によって、住民同士のつながりが分断される。そのため、本来のコミュニティのつながりを維持することができるよう、集う場をつくることや連絡ツールの作成、情報の発信などを行う。

①〈重層的かつ多様な集う場をつくる〉

趣味活動などを通して、定期的に住民が集う場をつくる。

「知り合いの人を確認したいとか、連絡を取り合いたいだとか、話す場がほしいとか。(中略)やっぱり場があると、そこに集まってほっとして、いろんな情報交換できたり、うーん、できますよねえ。」

②〈住民同士が連絡を取り合えるようにする〉

住民同士が連絡を取り合えるよう、住民の所在や連絡先に関する情報を収集し、電話帳の作成や各戸への電話の配置などを行う。

「最初に何をしたかって言うと、避難住民の電話帳を作成したんですね。で、これが各戸へなんか連絡をとって(中略)配布してんですね、各戸にね。」

③〈定期的に住民の情報を発信する〉

遠方に避難した人ともつながりが持つことができるように、広報などを通して、各戸へ定期的に情報提供を行う。

「そういうところ(広報)の情報で、つながってるという意識。遠くにいった人ともつながり。そこに声を載せてみたりだとか。」

12)《コミュニティのアイデンティティを維持する》

コミュニティには、他にはない独自の文化や風習があることを把握する。また、住民同士がそれらを披露し合い、語り合える場をつくる。

①〈小コミュニティとして集落ごとに捉える〉

支援を行う際、自治体としてではなく、集落など被災前のつながりの単位を小コミュニティとして捉える。

「この話もまた大事なんですけど、コミュニティを見る時には、この5集落がいろんなところに。これなんかにも書いてあると思いますが、あの一、5集落があつて。」

②〈コミュニティで育んできたものを維持する〉

農園で地域特産の農作物の種を確保することや、ふれあい集会で踊りや民謡を披露することができるような場をつくることで、コミュニティが育んできたものを維持できるように支援を行う。

「これは雇用の確保と島特産の農作物だとかその花だとかのこう、種を確保しておいたり。」

「コミュニティが育んできて、踊りだとか民謡だとかそれを披露し合うっていうのは、その一、ふれあい集会。」

13)《被災前からある住民が持つ力を意識する》

避難先においても、被災前からある住民同士の協働や共助、自立の力を崩さないように意識する。

「合言葉で書いてあったようなこともなんか記憶にあるんだけど、協働、共助。(中略)島民、島民がこうしようってやったのね。協働、共助。あと、自主、自立。自分たちで、自立して、頑張ろうっていう、島民のこれが島民の意識、だったんだよねえ。」

1-5.[ゆるやかなコミュニティにするための調整]

コミュニティのつながりが強いことにより、そのコミュニティに属することができない可能性がある住民がいる。避難先の住民や自治会と協働したり、いつでも戻れるコミュニティにしたりすることで、誰もが居心地のよいコミュニティにする。

14) 《コミュニティのつながりを強調しすぎない》

コミュニティのつながりが強いことは、肯定的側面ばかりではなく、住民にとって負担となるような負の面もある。また、コミュニティのつながりから距離を置きたい人もいる。コミュニティづくりの支援では、つながりを強調しすぎないように意識する。

① 〈コミュニティのつながりが持つ負の面を意識する〉

コミュニティのつながりを強調しすぎると、コミュニティに参加できない人にとって疎外感が生まれる可能性があることを意識する。

「あっ、これもあれかな？良さだけが、こうでもそれがすごい力になっちゃうと、なんか村八分になっちゃうみたいなの。」

② 〈コミュニティのつながりから距離を置きたい人を尊重する〉

住民同士の深い関係が苦手な人たちの思いを尊重する。

「コミュニティの良さとやっぱりあの一、そういうとこに、嫌な人もいるわけで、(中略)それはもう、それで、あの、尊重すべきで。」

15) 《避難先の住民および自治会とつながり持つ》

住民にとって居心地がよい場所となるように、避難先の住民や自治会と交流し、つながりを持つことができるように支援を行う。

① 〈避難先の住民と相互に交流できるようにする〉

避難先の自治会の行事に参加することで、避難先の住民との関わりを持つことができるようにする。さらに、避難している住民が避難先の自治会でも役割を担うことができるよう支援を行う。

「まずはあの一防災組織でもなんでも。あの一こういうあの一避難訓練がありますよって。そうすると三宅の人も出てきてくださいとか言っってね、そこにも参加するようになったり。」

「三宅の人も当番に入れましようって言って入れてくれたりだとか。もう本当に、その住民にさしてくれたっていうのかね。あの一まあ、居心地のよい、場所っていうかね。そういうあれはありました。」

② 〈避難先の自治会の協力を得る〉

住民のつながりを維持するために、避難している住民の集う場の確保や、共に行事を行うことなど避難先の自治会の協力を得る。

「で、じゃあ三宅のコーナー作っていいですよって言って作ったりとか。そんで今度はじゃああの一冬には、お

餅つきしましょう。(中略) じゃあその薩摩をあれしまずんで、三宅ではそれで用意しますよねって言うふう。」

16) 《いつでも戻れるコミュニティにする》

災害により、コミュニティから離れて行ってしまった住民が、いつでも戻れるようなコミュニティにする。

「帰れなくなっただけでいつでも受け入れてくれるよみたいな。そういう緩やかなコミュニティに。」

2. カテゴリーの関連性

災害時のコミュニティづくりに関する支援技術として抽出された、大カテゴリーおよびカテゴリーの関連性を説明する (Figure.)。

まず [基盤となる技術] は、《支援者同士が支え合う》が基礎となり、《避難している住民と協働する》と《被災後の新たな広域ネットワークを構築する》が発揮される。この [基盤となる技術] が元となり、[仕組みをつくり、支える技術] と [出向く支援] が行われる。

[仕組みをつくり、支える技術] は《地区リーダーを多面的に支える》により、《避難先単位で行政と住民がつながる仕組みをつくる》と共に《コミュニティづくりにつながる雇用の仕組みをつくる》が展開される。[出向く支援] は、《災害によって変化した避難生活での課題を把握する》と《家庭訪問により個別支援を行う》、《住民個人とコミュニティとの関係を調整する》、《集う場へ出向いて、生活や健康への支援を行う》から構成される。これら [仕組みをつくり、支える技術] と [出向く支援] が関連しながら、[被災前のコミュニティの維持] が行われる。

[被災前のコミュニティの維持] は、《被災前からある住民が持つ力を意識する》と《コミュニティのアイデンティティを維持する》、《住民のつながりを維持できるようにする》からなる。さらに [被災前のコミュニティの維持] に留まらず、[出向く支援] に含まれる《住民個人とコミュニティとの関係を調整する》で、[ゆるやかなコミュニティにするための調整] が展開される。すなわち《コミュニティのつながりを強調しすぎない》や《避難先の住民および自治会とつながりを持つ》、《いつでも戻れるコミュニティにする》によって、誰にとっても居心地がよい [ゆるやかなコミュニティにするための調整] が発揮される。

考 察

災害により、個人の生活もコミュニティも大きな変化を強いられる。そのため、災害時のコミュニティづくりに関する支援技術において、本研究結果より、以下3つの要素が重要であると考えられた。1) 災害時にも用いられる平常時と同様の支援の原則、2) 災害時のコミュニティづくりにおいても不可欠な個別支援、3) コミュニティ

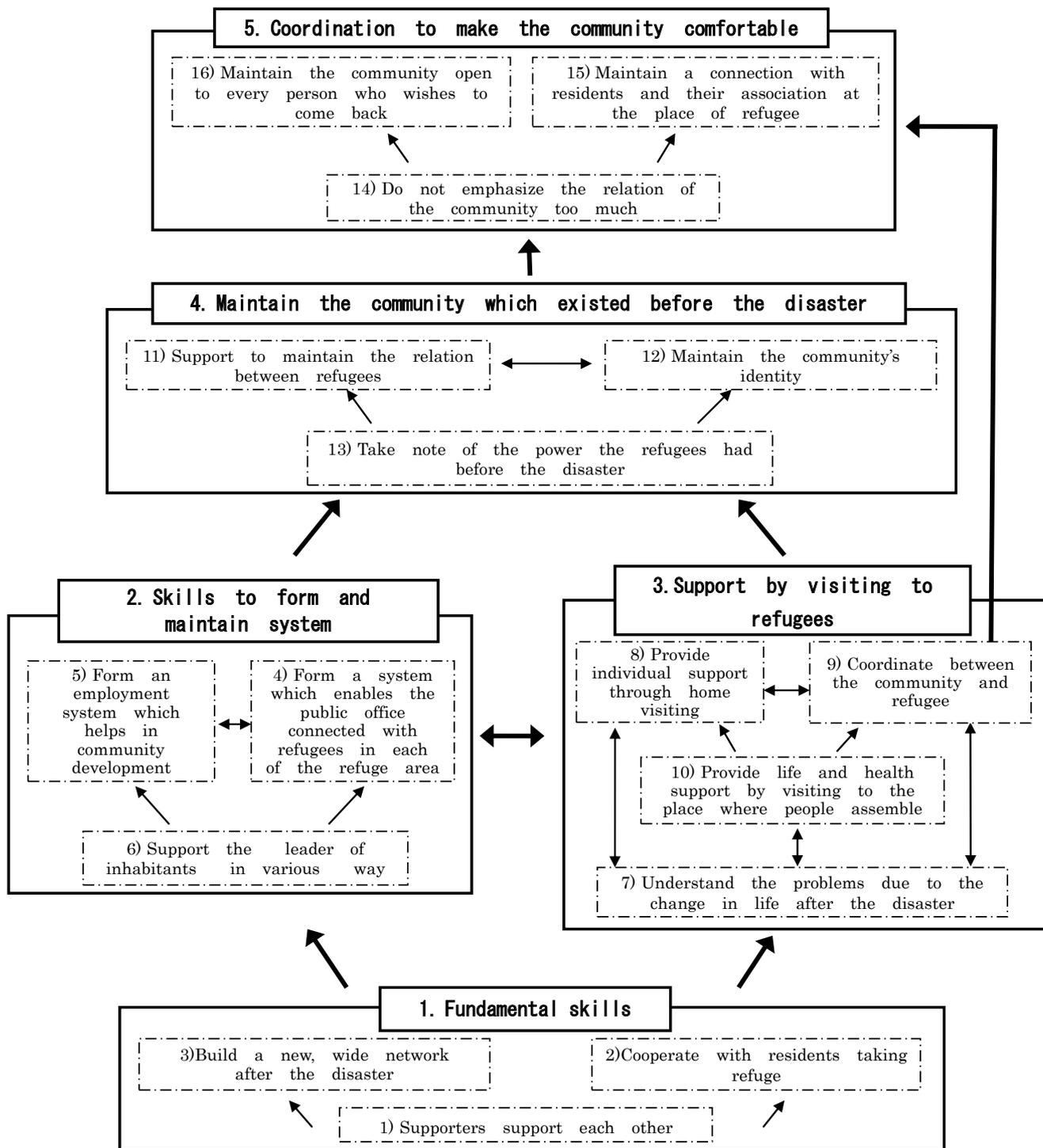


Figure. The relevance of a category extracted as support skills for community development at the time of the disaster

ニティのあり方に対する住民と協働した探求，である。これら3点について述べていく。

1) 災害時にも用いられる平常時と同様の支援の原則

大規模災害の発生は，住民の生活環境を劇的に変化させ，元々存在していたコミュニティのつながりの分断を余儀なくさせることがある。一度分断されたコミュニティのつながりを再構築するのは容易ではなく，住民が日常生活を取り戻すために必要とされる支援技術は，特異なものであると推測しがちである。しかし，本研究より，災害時においても家庭訪問や健康教育，コミュニティづくりに関する仕組みづくりなど，個別や集団，地域それぞれに対する支援が用いられていることが明らかになった。自然災害時における保健師活動として奥田¹⁵⁾は，要援護者等への個別支援だけでなく，健康教育や自治会長などの住民リーダーとの連携，調整という集団や地域に対する支援を挙げている。これら個別，集団，地域に対する支援は本研究結果と一致していた。

一方で宮崎ら¹³⁾は，住民が健康かつそれぞれが生きがいをもって生活していく地域を作るために必要な支援として，個別や集団，地域全体それぞれへの支援が挙げられると地域看護の原則を述べている。また宮崎¹⁴⁾は，地域看護活動とは個人の健康生活へ予防的に働きかけ，同時に個人を取り巻きさまざまな環境，すなわち，その人の所属するグループ，コミュニティを対象に働きかけることであると定義している。つまり，災害時の支援はこれら平常時の支援の原則と変わるものではなく，個別や集団，地域に対する支援を連動して展開されると考えられた。

2) 災害時のコミュニティづくりにおいても不可欠な個別支援

先行文献では，災害によるコミュニティのつながりの変化は健康に悪影響を与えることが懸念され，災害時のコミュニティづくりの重要性が指摘されている¹²⁾³⁾⁴⁾。本研究においても，個別支援によって住民一人ひとりの生活状況や健康課題を把握することで個人の生活を支援すると同時に，人と人や人と場をつなぐことなどさらなる支援に展開されると考えられた。すなわち，災害時の個別支援は，コミュニティづくりへとつながる重要な支援技術であると示唆される。

井伊¹⁶⁾らも，災害後に転居を余儀なくされた人々への支援としてコミュニティづくりを挙げているが，ここでも災害後の困難な生活の中を強いられる段階での個別支援の必要性を報告している。本研究結果でも「ともかく最初はだからこ... 個別から入った。」という言葉から示されるように，支援の始まりとして特に個別支援を意識して行っていたことが明らかになり，個別支援の重要性が示唆された。

3) コミュニティのあり方に対する住民と協働した探求

重川⁵⁾は，災害時にはコミュニティのつながりを維持することができるような支援が必要であると述べている。また，本研究結果においても，「仕組みをつくり，支える技術」により住民の健康やつながりを支えることで，被災前のコミュニティを維持できるような支援へと発展していくことが明らかになった。

また井伊ら¹⁶⁾は，様々な理由で集団の場には出られない人や，その人々が決して人との関係を断ち切りたいと考えているわけではないと述べ，そのような人々への支援の必要性を報告している。本研究結果からも，つながりの強すぎるコミュニティには負の面もあることを意識し，コミュニティのつながりから距離を置きたい人へ配慮することも重要な支援技術であることが示された。そして，「帰れなくなったっていつでも受け入れてくれるよみたいな。そういう緩やかなコミュニティに。」という言葉が示すように，コミュニティのつながりから距離を置きたい人が，いつでも出入りできるコミュニティを構築することが重要であることが明らかになった。同時に，避難している住民が避難先の自治会の役割を担うなど，被災前のコミュニティに固持せず，避難先の住民と協働して新たなコミュニティをつくることは，居心地の良いコミュニティの構築につながる支援技術と考えられる。

住民にとって居心地のよいコミュニティのあり方は多種多様である。住民の中でコミュニティの強いつながりを好む人や，コミュニティのつながりから距離を置きたい人もいる。また，避難先のコミュニティの一員になることで新しいつながりで支えられる人もいる。支援者はそれぞれの住民にとって，居心地のよいコミュニティとなるよう住民と共に探っていくことが必要だと考えられる。

研究の限界と課題

本研究は，被災前からコミュニティのつながりが強い地域を対象とした。しかし，コミュニティのつながりの希薄化が指摘されている地域においては，本研究結果を応用することはできないと考えられる。被災前からコミュニティのつながりが構築されていない地域においても調査を行い，一般化することが今後の課題である。

謝 辞

本研究にあたり，ご多忙にも関わらずインタビュー調査にご協力頂いた4名の方々，また三宅島での調査期間中私たちを快く受け入れてくださった住民の皆様，保健所の皆様に心より御礼申し上げます。

本研究は，杏林医学会学生リサーチ賞を頂きました。心より感謝の意を申し上げます。

引用・参考文献

1. 東京都衛生局：歩いた・触れた・聴いた，そして－兵庫県南部地震に伴う神戸市への保健婦派遣に係る活動報告書－．東京，1996．p. 15－18.
2. 神戸弁護士会：阪神・淡路大震災と応急仮設住宅－調査報告と提言－．2011-11-4. http://www.lib.kobe-u.ac.jp/directory/eqb/book/6-145/pdf/05_chapter3.pdf
3. 後藤武：阪神・淡路大震災時の対応，公衆衛生，69：445-449，2005.
4. 塩崎賢明：大震災からの復興とコミュニティ再生，保健師ジャーナル，60：359-363，2004.
5. 重川希志依：高齢社会と防災対策，北陸の視座，16：13，2005.
6. 国土交通省河川局防災課災害対策室：災害列島 2005 新潟県中越地震．2005．p. 36-43.
7. 全国保健師長会：大規模災害における保健師の活動マニュアル．2011-11-4. http://www.nacphn.jp/dl_file/H17chousa_03a.pdf
8. 桑村健司，小杉真紗人：三宅島噴火災害 被災住民のコミュニティの力と保健所のサポート，保健師ジャーナル，60：342-350，2004.
9. 徳田武：検証・三宅島全島避難の教訓 自治体を越えた避難に有効な支援とは？，公衆衛生情報，41：14-17，2011.
10. 松村明：大辞泉．東京，小学館，1995．p. 1004.
11. 東京都三宅村：平成12年(2000年)三宅島噴火災害記録．2011-5-15. <http://www.miyakemura.com/kiroku/index.html>
12. 東京都島しょ保健所三宅出張所：三宅島火山噴火・保健師の活動．2011-5-15. <http://h-crisis.niph.go.jp/node/22377>
13. 宮崎美砂子：最新地域看護学 総論．宮崎美砂子，北川三津子，春山早苗，田村須賀子編．東京，日本看護協会出版会，2007．p. 2.
14. 宮崎紀枝：標準保健師講座・1 地域看護学概論．奥山則子．東京，医学書院，2007．p. 55.
15. 奥田博子：自然災害時における保健師の役割，保健医療科学，57：213-219，2008.
16. 井伊久美子，河内恵子，川村牧子，島津和江：阪神淡路大震災被災後の長期支援の検討－恒久住宅転居後震災被災者の健康問題と生活の実態－，兵庫県立看護大学紀要，8：98-99，2001.
17. 大野かおり：被災初期における在宅生活者への支援(第2報)，神戸市看護大学短期大学部紀要，18：9-15，1999.
18. 高橋利昌：神戸からの発信－地域コミュニティの絆－，日本集団災害医学会誌，11：22-28，2006.
19. 中西睦子監修：地域看護学．中西睦子．東京，健帛社，2003．p. 202-210.
20. 奥田博子：災害時における保健師の役割，保健師ジャーナル，67：186-190，2011.

Support skills for community development at the time of a disaster — Through support activities during the Miyake Island volcanic eruption disaster —

**Nayuki HARAGUCHI, Takaaki IMAIZUMI, Takahiro SUZUKI
Yukino HASHIMOTO, Chika TAKAGI, Sachiko OHKI**

Kyorin University Faculty of Health Science Department of Nursing

Summary

The purpose of this study was to clarify support skills for community development at the time of a disaster in reference to support activities at the time of the Miyake Island volcanic eruption disaster that forced inhabitants into regional refuges. We interviewed two public health nurses, staff of a social welfare council, and leader of inhabitants who worked to promote support at the time of seeking refuge from the disaster. We analyzed the interview contents qualitatively. As a result, five large categories, 16 categories and 35

subcategories were extracted.

It was suggested that the principles of support activity to promote community development were similar under both normal conditions and during a disaster, they were that support activity for individual persons, groups, and communities were relation mutually. In addition, a individual support is particularly important. Furthermore, supporters are required to investigate the kind of community that should be maintained, and create a community following a disaster along with inhabitants.